

もりした まさき
薬剤学分野 助教 森下 将輝

『イシューからはじめよ
—知的生産の「シンプルな本質」』
安宅和人

英治出版 (2010年)

私が本書を読んだのはごく最近です。SNSで話題になっていたので「試しに読んでみるか」くらいの興味で読み始めたのを覚えています。著者は日本の大学で修士号を取得後、外資系コンサルティング会社に勤めた後、脳神経科学の研究で博士号を取得された方です。著者が「研究者」と「企業人」の2つの顔を持っており、大学での学術研究と、企業でのコンサルティング業務の両方に携わった経験をもとに、イシュー（問題）を見極めることの重要性を解説しています。

この本では冒頭で「知的生産性の高い人」の特徴を紹介し、続いて目の前の課題や仕事に対してどのような意識で取り組むと良いかを、具体的なエピソードを



交えて述べています。そして「与えられた問題にどう対処するのか」の前段階である、「真に重要な問題の見極め」から入ることが、生産性を高めるポイントであると書かれています。

特に私が印象に残っているのは、問題を見極める際の「悩む」と「考える」の違いについての解説でした。詳しくは本書を読んで頂きたいのですが、この解説が皆さんの役に立つ場面が薬学部6年間の中にもあるのではないかと思います。

例えば、皆さんが日々大学で受けている講義や実習は、初めからイシュー（問題）とその答えが設定されているケースが大半だと思います。対して、研究室配属後の研究活動では「何が答えなのか」最初にははっきりとしない場面もあると思います。この時に、イシュー（問題）を正しく見極めることで取り組む研究内容の意義が理解できるのではないかと私は思います。そして、社会ではそのような場面に直面することが多い、ということも本書から知ることが出来ます。

この他にも、「理解することの本質は何か」を著者の専門領域である脳神経科学の観点から解説されている点などは非常に興味深かったです。

学校の試験では解くべきイシュー（問題）が既に設定されていますが、卒業後は自らそれを見極めていく必要があります。在学中に本書を一度読まれてみてはいかがでしょうか。

かねさき あかね
事務局 調達検査室 金寄 茜

『星の子』

今村夏子著

朝日出版社 (2017年)

大切な人が信じていることを、わたしは理解できるだろうか。一緒に信じるのが、できるだろうか――。¹

「多様性」。年齢、性別、人種、経験、諸々。近年では学校教育にSDGsが取り入れられるなど、さまざまな「ちがいを」尊重せんとする意識が高まっています。…本当に？

わたしは「多様性」を尊重します！言葉だけなら簡単です。そのなかには、自分に関係ないならいいけど、なんて人もいるかもしれません。でも、それは本当に「多様性」を尊重していると言えるのでしょうか。もし自分の大切な人が、家族が、親戚が、パートナーが、友人が、「ちがい」だったら？変わらず隣にいて「信じる」ことができますか？

『星の子』は、生まれつき病弱な主人公・ちひろを救うため、大好きな両親が神秘の力を宿しているという水にすぎり、次第に「あやしい宗教」にのめり込ん



でいくお話です。困窮化する一家の生活、家出するお姉ちゃん、ちひろを救おうと手を差し伸べる親戚のおじさん、両親の儀式を見たイケメン先生の残酷な言葉。それでもちひろは両親が大好きで、大好きで、大好きで！だって両親と行く集会は楽しいし、仲のよい信者の友人もいる。でも信教の自由は、宗教1世にはあるけど2世にはないのも、また事実。苦しくて、切なくて、恥ずかしくて、ちひろのころは何度も何度も揺さぶられます。

…このお話は「ちがいを」否定も肯定もしません。ひとつの家族の形をありのままに描いたお話です。だからこそ「多様性」とは、「信じる」とはいったい何なのか。自分のなかで追体験して、深く考えるきっかけとなるでしょう。「多様性」について考えてみたい人、尊重できていると思う人も、もし自分の身近で大切な人が「ちがい」だったら？という視点で、ぜひ一度読んでほしいと思います。

「裏切られたとか期待していたとか言うけど、その人が裏切ったわけではなく、その人の見えなかった部分が見えただけ。見えなかった部分が見えたときに、それもその人なんだと受け止めることができる、揺るがない自分があることが信じることと思えました。」²

¹今村夏子『星の子』朝日新聞出版、2017年より

²“芦田愛菜、”信じることを熱弁 達観ぶりに永瀬正敏ら簡単「これ以上の答えはない」”、Drama&Movie by ORICON NEWS、2020-09-03、<https://www.oricon.co.jp/news/2170996/full/>。（参照2023-07-05）